



トピックス

- 育土の時間
- 第7回有機農業技術公開セミナーin北海道・津別のご案内
- 第6回有機農業技術公開セミナーin高知を開催しました
- 有機農業研究者会議2009開催報告

www.ofrc.net

特定非営利活動法人
有機農業技術会議 事務局
発行責任者：藤田 正雄

育土の時間

育土とは、要するに土が出来てきて肥沃になり、例えば結球野菜が字のごとくに球になるまで土を作ってゆくことを意味する。作るとはいっても、誰も土を作ることには出来ない。土を作るのは、土壌という無機物と土壌に生息する無数の生物（微生物と土壌動物）、土壌に生育する植物、そして太陽・雨・風、地上の生物であり、それらすべてが協働して出来る歴史的な産物だと言うことが出来る。我々人間のなし得ることは、前述の自然物の協働作業がすみやかに進行するように手助けすることだけである。それを土作りなどとは、何という傲慢な言いざまであろうか。むしろ土の中にある無数の生物に対する畏敬の念こそが必要な作業ではないだろうかとおもう。

傲慢さといえば、害虫・天敵という言葉も該当する。IPMで土着天敵などと言い、新たに見出したような言いざまである。見つけられたことにはおめでとうとは言いが、これまで知らなかっただけではないかと言いたい。また、そもそも害虫・天敵という語そのものがおかしいのである。世に害虫はいなく、害虫のための天敵もない。捕食する生物と捕食される生物とがいるだけなのである。そういう見方こそが、生物がウヨウヨ居る圃場、すなわち有機農業の圃場にこそ必要なのである。同じこ

西村 和雄（有機農業技術会議 代表理事）

とが土作りという語にも該当するのだと私は思う。もう少し文句を言うと、バイオが万能のごときうたい文句で遺伝子をも自在に扱える紙のようにもてはやされてはいるが、土作ってみるといいたいところである。無茶な言いかたしてごめんなさいね。

さて土作り。直接作れるものではないとすれば、メインの土壌生物が喜ぶような環境を作ることではないだろうか。技術会議の理事でもある橋本力男氏の曰く、土の食べ物をたっぷりだけと限度のある与え方で、立派な土が育つのである。土が育つ工夫。それこそが土作りの意味ではないだろうか。我々が出来ることというのは、土を育てること。言い方を変えれば、生きている土としての、土の育て方を工夫することに他ならない。

私自身、育土という言葉を知ったのは、およそ40年前にもなる。以来、土は生き物だという前提に立ってさまざまな農地を見続け、いろんな工夫を考えてきた。その課題の一つが、40年前には「結球野菜がまともに球になるには最低10年はかかるよなあ」という実践農家の慨嘆であった。むかし、技術からは程遠い距離にあった有機農業は、今でもかなりの距離を実感してはいるのだが、育土には10年以上の歳月が必要であったのだ。私はそれを最短1年に短縮できるような工夫を考えてき

ご案内

第7回有機農業技術公開セミナーin北海道・津別 ～安全・安心の大規模農業を考える～

今回は、北海道における有機農業を核とした農業の可能性について、政策および技術についてご講演をいただきます。また、有機農業実施者や流通関係者、行政、そして会場の皆様を交えて、有機農業の推進・北海道農業の在り方についてディスカッションしていきます。

また、同時開催イベントとして見学会も企画しています。

日 時 2010年2月24日（水）13:00～17:30
場 所 津別町中央公民館（北海道網走郡津別町）
参加費 1,000円（資料代）
主 催 NPO法人有機農業技術会議
共 催 津別町有機農業推進協議会・津別町・JAつべつ
後 援 農林水産省・北海道

翌25日の午前中には、津別町有機農業推進協議会主催の見学会（日本初の有機JAS山田照夫氏の牧場など）もごさいます（参加費別途1,000円）。詳細は決まり次第順次ウェブサイトにてお知らせいたします。

日 程
基調講演I「有機農業を核とした北海道農業を目指して」
麻田信二氏（学校法人酪農学園）
基調講演II「大規模有機農業の実際と課題」
成田保三郎氏（専修大学北海道短期大学）
パネルディスカッション「安全・安心の大規模農業を考える」
コーディネーター：木嶋利男氏（有機農業技術会議）
パネラー：山田照夫氏（山田牧場）、大田順夫氏（中富良野町）、安川澄子氏（酪農学園大学）、堀川昌昭氏（農林水産省）、麻田信二氏、成田保三郎氏、さっぽろ生協
情報交流会（参加費別途5,000円）

た。そして、どうやら1年にまで短縮できるという目途が立てるほどにはなったのだが、一方でいささか寒い状況も身にしてみても感じている。

それは次の有機農業を担うべき人材を、どこまで育てているのだろうかという危惧である。よく、「いやあ、あいつはまだダメだよ」とか「まだ早いよ」などという、まるで自分が若いときに言われたことをそのまま言っているのではないかと思うことを、随所で散見する

からである。有機農業推進法が成立してから3年になるうというのに、若い芽を育てるような機構が、どこまで出来つつあるのか？あるいは、育てようという機運がどこまで盛り上がっているのか、あるいは時間が育土と同様に進んでいるのかと考えると、ため息をつかざるを得ない。とは、言いすぎだと思われるだろうか。育土と同じ水平線で、もう一度考え直してもいいのではと最近しきりに思うのである。

第6回有機農業技術公開セミナーin高知を開催しました

昨年11月18日～19日に高知にて、初めて県の共催を得て開催しました。有機農業と施設栽培という、一見相いれないようなテーマについて、様々な角度から議論されました。また、高知県や高知市としても今後本格的に有機農業の推進を行っていくため、地方自治体の先進事例紹介として今治市から発表をいただきました。会場には260名ものご参加がありました。

施設栽培について、根本久氏からは施設栽培という栽培形態と生きもの・自然との距離からご説明いただき、その環境における天敵利用に関する考え方、具体的天敵・害虫名から、実施事例まで幅広くご説明いただきました。また、農家からの事例発表としては、草を完全に

抑えて害虫を制御する方法、草をある程度生やし活かしながら制御する方法、IPM的手法により天敵を導入し抑える方法など、色々な視点からご発表いただきました。

その後は県の取り組みなどの紹介をしていただき、施設園芸はどうあるべきか、議論をしていきました。途中、妻との理解のしあい方に話が及ぶなど色々ありましたが、有機物の使い方などについて参考になることが多かったかと思えます。

翌日は、前日の発表者の一人である小田々氏の圃場を見学しました。小田々氏の特徴は防草シートやビニールマルチを徹底した草管理・効率化にあり、色々と考えさせられることが多かったかと思えます。

有機農業研究者会議2009開催報告

有機農業研究者や研究に関心の高い人々たちによる会議が昨年12月17日～18日につくば市にて開催され、定員一杯となる120名のご参加がありました。内容は土壌肥料・土壌病害対策と土壌生物性評価・実施事例報告・総合討議の4部構成でした。

第1部では、アンケート調査を基にした有機農業の水稲、野菜、果樹・茶の現状と課題や、交付金プロ「日本型有機農業」で取り組み中の有機野菜産地の肥培管理調査結果などを紹介していただきました。有機農業において、養分バランスが崩れている土壌がある一方、養分集積が認められない土壌があるなど、多様な実態が明らかになりました。

第2部では、熱利用による土壌消毒技術、特にマイクロ波土壌消毒法や、土壌の環境DNAを解析することで新しい土壌微生物評価法の開発の現状とその利用につい

て紹介いただきました。

第3部では、永年作物、野菜・畑作物、水稲栽培について、それぞれ農家に事例を紹介いただきました。

第4部では会場からの発言を交えて、有機農業の実際の取り組みをもとにした総合的な実施者の判断と有機農業研究の視点、有機農業にあった機械開発等について議論しました。

資料はウェブサイトで公開しています。



賛助会員募集のご案内

有機農業技術会議では、当会議の趣旨に賛同してくださる方を対象に賛助会員制度を設けております。会員の方々へは、電子メールによる機関誌や研究会などのご案内、研究会・研修会などへの割引参加、総合研究会への参加、ご意見・ご要望の反映などのサービスもあります。この機会に是非お申込みください。

お申し込みは技術会議事務局にご連絡ください。また当会議ウェブサイトwww.ofrc.netのホーム→入会案内からも用紙がダウンロードできます。皆様のご入会をお待ちしております。

NPO法人

有機農業技術会議事務局

〒390-1401

長野県東筑摩郡波田町5632

(財)自然農法国際研究

開発センター

農業試験場内

FAX:0263-92-6808

E-mail: office@ofrc.net

Website: www.ofrc.net